

2015.12

編集発行人・吉田隆司

毎月1回、1日発行

定価1部100円/1年1000円(送共)  
郵便振替 東京00100-0-38184

〒112-0004東京都文京区後楽1-5-3  
TEL. 03-3814-3591  
FAX. 03-3814-3590

Website: <http://www.rizhong.org/>  
E-mail: [info@rizhong.org](mailto:info@rizhong.org)



## A先生の新語コーナー



### jiàng xī jiàng zhǔn “降息降准”

利下げと預金準備金率引き下げ。中国人民銀行（中央銀行）は今年6月27日、政策金利である銀行の貸出・預金準備金利と預金準備率を同時に引き下げると発表した。1年物の貸出金利と預金金利はともに0.25ポイント引き下げられ、それぞれ4.85%と2%になる。また、一部銀行を対象に預金準備率を0.5ポイント引き下げた。基準金利と預金準備率を同じ日に引き下げるのは、世界的な金融危機にあった2008年12月以来のこと。

(A)

## 第19回（2015年）日中学院倉石賞受賞者決定！

この度日中学院倉石賞選考委員会が開かれ、本年度は公益財団法人国際文化フォーラム殿の受賞が決定しました。

**受賞者：公益財団法人国際文化フォーラム（TJF）殿**

**推薦者：加藤晴子氏**（東京外国語大学大学院総合国際学研究院教授）



推薦の言葉 加藤晴子氏

TJFは日本の高等学校における外国語教育（特に中国語教育・韓国語教育）、及び海外（特にアジア太平洋地域）の初中等教育における日本語教育の普及と推進を目指して、1987年以来活動を行ってきた。

中国語教育の面では1994年から活動を始め、全国の高校中国語教育の実態調査を1994年と1997-98年の2回実施し、それぞれ調査結果を『いま高校の中国語教育を問い直す—外国語教育が直面する課題と提言—』（1996）、『日本の高等学校における中国語教育の広がり韓国朝鮮語教育との比較で見る』（1999）として発行した。また、文部科学省の委嘱事業として、中国語と韓国語教育の指針の作成をめざすプロジェクトを立ち上げ、6年間にわたる研究成果を、『外国語教育のめやす—高等学校の中国語と韓国語教育からの提言』（2013）として編集・発行した。なお、本賞受賞団体である全国高等学校中国語教育研究会の活動をも積極的に支援しており、『高校中国語教育のめやす』（1999）の作成に対しても助成と編集協力を行っている。

また、高校中国語教員研修として、中国語科教員免許取得も可能な集中講座と、中国での実地研修をコーディネートしてきた。

学習者支援の面では、中国語を学ぶ日本の高校生を、2007年から2012年まで毎年約90名10日間中国に派遣し、中国語の短期研修と、日本語を学ぶ中国の高校生との交流プログラムを実施し、高校中国語教師からも大変高い評価を得た。

日本語教育の面では、中国の日本語教員の日本への招請、初級日本語教材の開発等に携わってきた。

これらの諸活動については、『小溪』、『ひだまり』、『国際文化フォーラム通信』等の冊子やウェブサイトを通じて広報を行っている。

以上のように、TJFは初中等教育における日中両言語の教育・学習の普及・推進を通じて両国間の交流に大きく寄与し続けており、本賞の趣旨に相応しく、受賞者候補として推薦する。

授賞式：2016年2月20日（土）16：00～

場 所：日中学院内

内 容：受賞者の基調報告等

参加をご希望の方は、当日お越し下さい。

2014年末に亡くなられた、林敏同学の追悼文をお寄せいただいたので、ご紹介します。

## 林敏同学を悼む 鈴木千慧子（倉石中国語講習会43期生）

中国語を究め、魯迅の研究者でもあり翻訳もした林敏さんが昨年暮れに亡くなった。76歳だった。重い障害を負いながら生きぬいた人生はまさに闘いの連続だった。

私が林さんと知りあったのは、50年余も前、早大での倉石武四郎先生の中国文学史の講義を聴講した時だった。倉石先生は黒板にびっしりと板書して説明なさる。学生たちはそれを懸命に書き写すのだが、ふと隣をみると隣席の学生は何も筆記していない。ただ先生の説明と板書の内容をしっかりと頭の中に入れ込もうとしている様子だった。指が動かないために筆記ができないことがすぐわかった。このひとが林さんだった。出産時の脳性麻痺のため四肢はいうまでもなく首も坐らず、視力は眼鏡をかけても0.1以下、発声もうまく出来ずことばがはっきりしなかった。後で知ったのだが、この頃お母さんの手を離れてひとり歩きできるようになったばかりだった。先生の許可を得て聴講に来ていたのである。

ご両親が台湾出身だった林さんは1945年を境として突然「日本人・外地人（蔑称）」から「中国人」となった。倉石先生のラジオ講座を聞いたり、『魯迅選集』を読んだことで、「新中国の中国人」らしくなりたいと倉石中国語講習会（後の日中学院）へ通い出した。当時、日中間の国交が樹立されておらず、中国語学習は困難をきわめた。そのうえ中国人とはいえ中国語はまったくの初心者で発音に障害のあった彼女の苦労は並大抵のことではなかった。しかし長年にわたる必死の努力の結果、のちには学研の『魯迅全集』の翻訳に名を列ねたり、横浜市大で中国語を教える状態にまでなったのである。若き日、私は林さんと中国文献の講読をしたことがあった。彼女の綿密な下調べとそこから生まれるこなれた和訳はその頃から際立っていた。将来は自立して翻訳で生計を立てていきたいという希望はこの頃から持っていたようだ。その夢を実現するため、旺盛なチャレンジ精神を発揮したのが開講したばかりのNHK学園（通信高校）に入学を申し込んだことだ。小学校にも入学したことがない彼女の経歴は厳しい拒絶が待っていたが、何度も粘り強く交渉した結果、ついに入学が認められた。卒業後、家の仕事をしながら

更に弛みない勉学を続け、早大、都立大大学院へ進学し念願の就職も果たした。それが都立中央図書館での中国鍼灸古典書の翻訳の仕事だ。同じ麻痺患者の役に立ちたいということもあって、これこそ自分の本職と打込んだ。もうひとつは前述の横浜市大で中国語講師の仕事だ。学生たちが駅に迎えに来て、そのまま肩車で教室まで連れていってくれたことを楽しそうに話してくれたことがある。1コマの授業をするのにその何倍もの時間をかけて準備をしていた。

林敏さんと日中学院のえにしは深い。「日中学院は自分にとって掛け替えのない母校」といって、いつも心の拠り所にしてきた。不自由な体でありながらひたむきに生きるその姿と誠実な人柄は講習会・日中学院の多くの人々をひきつけていった。2009年、日中学院校友会は文化祭のなかで、林敏さんの「絵画展」（療養中に画いたユニークな色鉛筆画）を催し、同時に『林敏画文集』と『指扇通信』も発行した。後者の2冊はすぐれた文筆家でもあった彼女のエッセイを収録したものだ。このエッセイには両親や兄と兄嫁がいかに彼女を支えてきたか家族の惜しみない愛情がよく画かれている。

最後に、彼女が終生尊敬してやまなかった魯迅の『故郷』の終わりの言葉を掲げたい。

「思うに希望とは、もともとあるものともいえぬし、ないものともいえない。それは地上の道のようなものである。もともと地上には道はない。歩く人が多くなれば、それが道になるのだ」

林敏さん——困難なことがおこっても簡単には諦めず、力を尽くして希望への道を探していった人だった。彼女こそまさにこの魯迅の言葉を生涯かけて実践していった人だったといえよう。



# 2015年日中学院文化祭 2015年10月31日(土)

本科研究科

## 辛苦了+謝謝=我的感想 本科研究科 山本美紀子

2学期が始まってからあれよあれよと時間が過ぎて、気付いたら終わっていた文化祭。まずは全力で頑張っておこなった実行委員及び同学の皆様、文化祭を盛り上げる為に一緒に参加して下さった有志の方々、参加者を励ましサポートして下さった先生方と、「ああ、頑張っておこなったな!」と心から思わせて下さった来賓の方々全員に感謝します。

今年も日中学院は生徒数が少なく、委員会の中では勿論の事各クラスでも兼任が発生しました。去年も実行委員をやっていたとはいえ「本当に出来るのか……?」と正直夜も眠れない程不安でしたが、皆様の臨機応変かつ積極的な協力の下、案外何とかなりました。

準備中は各クラスで揉め事もあったかもしれないし、当日思わぬアクシデントもあった事でしょう。けれど終わった後の先生方、来賓の方の笑顔と拍手が皆様の今までの頑張りを証明してくれたのではないのでしょうか。「終わり良ければ全て良し」、参加した皆様全員が主役になって思い出に残る文化祭になっているのなら実行委員長としてこれ以上は何も望む事はありません。

私事ながら本科で唯一週6の研究科に属し(入れば分りますが研究科はかなりハードです(笑))、弁論大会や試験も控えながらの委員長だったせいか、正直二度とごめんな実行委員長でしたが、やり切った事を誇りに思いますし、ほとんどの辛苦は今笑話に化けたので良い経験をしたと思います。

皆さんお疲れ様でした+本当にありがとうございました!!!



本科二年



日本語科二年



日本語科一年



本科一年



中国結び



書道班



二胡



校友会ピースリーディング



本科学研究科では、より実践に対応できる中国語を養うため、翻訳、通訳、総合力アップ、異文化コミュニケーション等を学習しています。

今回は、総合力アップの授業で同学が書いた作文をご紹介します。



## 《学》 矢口和夫

一看“学”字，我就会联想到辛苦和快乐。

学习的过程确实是很辛苦的。对有些人来说，学习意味着白天死记硬背，晚上挑灯夜读，天天如此，枯燥无味。夜深人静时我还在奋游题海，每日清晨，我便起身诵读。但有时候在口译课上，我真是丈二的和尚——摸不着头脑了。为了缓解压力，我常常听音乐，看电视。

但我最近找到了学习中的乐趣。这就是学歇后语。这让我的想象力更丰富。（其实我的脑子已经开始退化了！）而且我从上月开始如果碰到四字成语或好词好句，马上记在本子上。最好写上成语的意思和认为好的理由，这样在写作时也能派上用场了。我觉得用珠宝装饰自己，不如用知识充实自己。“即使一百次失败，也要在一百零一次站起来”，我要好好学习这个精神。我认为，学习就会给你力量，知识会给你成功。

## 「学び」

「学」という字から、私は苦しさ楽しさを連想します。

毎日、昼も夜も、時には朝早く起きて一生懸命勉強しますが、意外と頭に入っていないことが多く、通訳の授業の時によく頭が真っ白になって、まともに答えられない時が何度もありました。そんな時は、気分転換を兼ねて、よく音楽を聴いたりしています。

ただ、楽しいと思えるようなこともありました。最近「歇后语」（中国語のしゃれ言葉）を学び始めたことです。想像力が高まり、とても面白いです。また中国語の四字熟語や良い文章などを見つけたらノートに書き写すことを2学期から始めました。作文などを書くときに役立つと思ったからです。失敗してもあきらめない気持ちで、これからも学び続けようと思います。ちょっと大げさですが、学びは力を、知識は成功をもたらしてくれると信じています。



## 日中学院校友会第20回中国旅行 校友会中国旅行のお知らせ

日中学院校友会では、例年中国への旅行を企画しています。

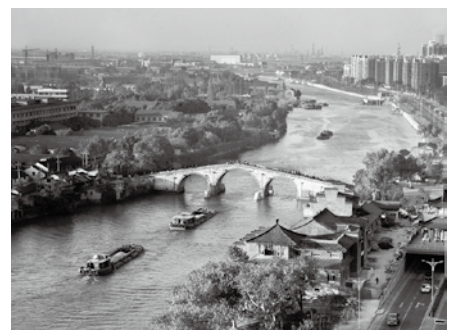
今年は「早春に浙江省の水辺と美食を訪ねる旅」と題して、今回の旅では、この水路に重点を置き、杭州の水源である千島湖（ダム湖）、西湖と共に世界文化遺産に登録されている京杭大運河（写真）を中心に、昔のクリークの姿を止める西溪湿地、銭塘江の大逆流（海嘯）などの水域と文化が結実している西湖の蘇堤や蘭亭の曲水を見てまわることで、水郷と江南文化の関心に想いを巡らせたいと思います。

文化にはもちろんお酒や料理も含まれるので、美食で有名な浙菜の東坡肉などが紹興酒も、発祥の地でその味わいを確かめたいと思っています。

皆様のご参加お待ちしております。詳しいパンフレットは日中学院校友会HP（<http://xiaoyouhui.sakura.ne.jp>）をご覧ください。

また、お電話にてパンフレットをご請求ください。

**日程：2016年3月24日(木)～29日(火)5泊6日**



# 図書室 だより

## 見逃した映画は 図書室で！

DVD『陸軍登戸研究所』完全版  
「陸軍登戸研究所」製作委員会／  
アジアディスパッチ



川崎市の明治大学生田キャンパス。かつてこの地には生物・化学兵器や偽札、風船爆弾などを開発し製造していた極秘の研究所があった。40数名の関係者が、驚くべきその機関の構造と実態を証言する。

中国紙幣らの偽札や偽パスポート造りにおいては、その技術者は戦後も横須賀米軍基地や米国本土に渡り、朝鮮戦争のために協力させられていく。731部隊と共同で行った人体実験、諜報員のスパイ・殺人用具、風船爆弾など実際に携わった人たちの貴重な証言は今でしか聞けない。さらに本土決戦に備え、長野に朝鮮人を使って掘らせた地下壕に天皇や軍の中枢が潜み、日本国民の頭上から細菌戦を行う計画まであった可能性が裏付けされた。枯葉剤を散布し毒物を川や井戸にも流せば上陸した連合国軍だけでなく、自国民も死滅する。

真実を、墓場まで持っていくと言う者、語るまでは死ねないと言

う者、戦後それぞれの人生も垣間見える。

### — 新着図書から —

●『新訂 標準中国語作文』模範解答・音声付き  
長谷川寛・張世国原著／中山時子監修  
東方書店



文字通り「名著新訂復刊！半世紀以上に刊行された伝説の中国語作文教材」の重みが伝わってくる。前訂との大きな違いは796題の練習問題に模範解答をはじめとした三種類の解答と音声を付けたことである。模範解答以外の解答も載せたことは、まさに中国語の広さと深さを教示したものといえよう。

●『中国語筋トレ 100読練習法』MP3CD付



木本一彰著  
東方書店

共同通信社の中国語サイト「共同网」  
(<http://china.kyodonews.jp/>)

の編集を担当している著者が伸び悩む自身の会話力をアップさせるため思いついた練習法を実践したところ、驚くほどの成果が得られた。

閃いたのはピンインであった。漢字は使わずピンインで繰り返し訓練することで「文字と意味」ではなく「音と意味」が脳にしみこむ。過去の自身同様、「さまよえる中級」者からの突破をすすめる。

●『中国語文法 補語完全マスター』CD付き 李軼倫著



コスモピア  
本学院講師でNHKラジオ「まいにち中国語」でもおなじみであった李軼倫講師の

新刊。

六種類（結果・方向・可能・様態・程度・数量）の補語の基本形と用法をわかりやすく説明し、会話・文章、センテンス、並び替えでトレーニングする。補語が苦手という人は、基本形と用法を読むだけでも進歩した感が得られるおすすめの書。

●『魯迅と日本文学』藤井省三著 東京大学出版会

●『人間・始皇帝』岩波新書 鶴間和幸著

その他の新着図書は図書室掲示板にてお知らせしています

### 一 寄 贈 一

下記の方より寄贈がありました。御礼申し上げます。

●麻生信男様より

『フイチンさん』上下巻 復刻愛蔵版

●岩佐昌暲様（編訳者）より

『中国当代文学史』

●「齐了会」佐藤ナヲ様（編集委員）より

『「齐了会の50年」訪中学生友好参観団の軌跡』 1965年～2015年

●初田宗久様（著者）より

『「中国人の9割が日本が嫌い」の真実』

●芳沢ひろ子様（共著者）より

『中国語で案内する日本』

# 12月の日中学院

日	一	二	三	四	五	六
		<b>1</b>	<b>2</b>	<b>3</b>	<b>4</b> ●本科1次入試 受付締切	<b>5</b> ●本科研究科学内 試験
<b>6</b> ●本科1次入試/ 日本語能力試験	<b>7</b>	<b>8</b> ●本科1次入試 合格発表	<b>9</b> ●本科2次入試 募集開始	<b>10</b>	<b>11</b>	<b>12</b> ●別科公開講座 13:00～ ●DVD上映会 「Jhon Rabe」
<b>13</b>	<b>14</b>	<b>15</b> ●本科定期試験 (～21日)	<b>16</b>	<b>17</b>	<b>18</b> ●日本語科 2学期最終日	<b>19</b> ●日本語科冬休み (～1/11)
<b>20</b>	<b>21</b> ●本科2学期 最終日	<b>22</b> ●別科259期 授業最終日 ●本科冬休み (～1/11)	<b>23</b> ●祝日 ●別科休み (～1/11)	<b>24</b>	<b>25</b> ●仕事納め	<b>26</b> ●学院閉門 (～1/5)
<b>27</b>	<b>28</b>	<b>29</b>	<b>30</b>	<b>31</b>		

- 2016年1月の日中学院
- ・6日…仕事はじめ・開門
- ・8日…別科公開講座(18:45～)入門・基礎
- ・9日…別科公開講座(13:00～)入門・基礎
- ・12日…本科・日本語科授業再開  
別科260期授業開始
- ・15日…中国語検定受付開始(～2/15)
- ・20日…日本語科2年 国会見学
- ・20日…本科追試(～26日)
- ・21日…本科 選択授業聴講①
- ・30日…本科生のための公開講座

## 【耳目】

### ●沖縄縄「佐喜真美術館」のこと

10月17日付け「東京新聞」に名古屋芸術大学主催の「佐喜真美術館のスタンス」の展覧会が紹介されました。この展覧会は名古屋大学内で10月28日まで開催されましたが、この「佐喜真美術館」館長の佐喜真道夫氏は、学院が内山書店にあった時代の元本科生でした。美術館は21年前、沖縄県宜野湾市の三方を米軍基地のフェンスに囲まれた場所に立てられ、主として丸木位里・俊夫夫妻の作品を展示しています。

収集した約千点の展示作品は、米軍基地内にあった土地を返還させ、その軍用地代を「生活費には使いたくない(東京新聞記事)」という思いで集められたそうです。

「佐喜真美術館」屋上からは、普天間基地が一望でき、沖縄のおかれている現状と基地隣に建設した佐喜真同学の思いが伝わってきます。「佐喜真美術館」：HP：<http://sakima.jp> TEL：098-893-5737

開館時間9：30～17：00※火曜休館

入館料¥700 那覇空港から高速50分

### ●映画「John Rabe」DVD上映会

戦中、日本軍の南京事件のさなか、現地人保護に奔走した、ドイツ人商社マン、ジョン・ラーベの書き残した、『拉貝日記(ラーベの日記)』を原作とした、ドイツ・フランス・中国の合作映画を上映します。中国語音声・字幕の映画となります。

日時：12月12日(土)14:00～/場所：日中学院/参加費：無料/定員：20名

※参加をご希望の方は日中学院事務局へお申し込み下さい。

## ●新着図書紹介

2014年に当学院で講演会を催しました中国詩人の田原先生がご自身の新しい詩集『夢の蛇』を寄贈してくださいました。

作品も興味深いですが、いわゆるあとがきにあたる箇所に「創作と翻訳のはざまに」という、対談形式でご自身の翻訳や日本語に対する考え方が掲載されています。翻訳を考える上で一読に値すると思いますので、皆さんお手にとってみてください。

